

知的障害者のための読書資料

08L4203 磯野 美希

1. 知的障害者の読書環境

知的障害者とは、知的機能の発達に明らかな遅れがある人たちのことで、発症時期はおおむね 18 歳以下で、適応機能に障害がある。しばしば知的障害者は本に興味がないと思われがちであるが、各種調査でも読書ニーズがあることがわかっている。しかしこの人たちの読書環境は十分でない。知的障害者に適した本の不足や、図書館や書店での支援の不足である。

2. 知的障害者のための資料

(1) みんながわかる新聞「ステージ」

やさしいことばでニュースを知らせることで、知的障害者の知識欲や社会活動を支援する。



(2) LL ブック

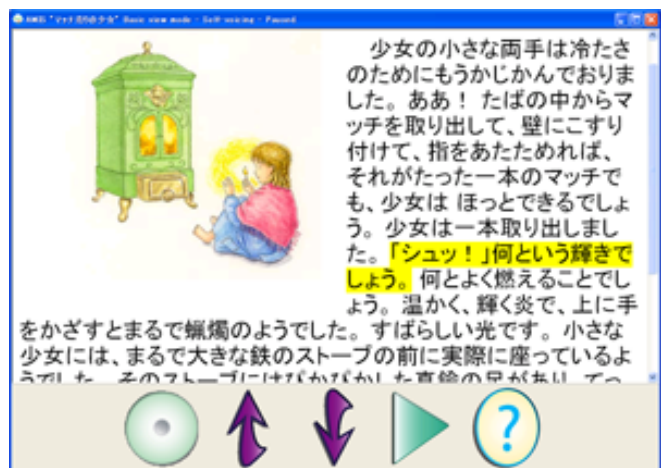
やさしい文章とイラスト、ピクトグラムを使って読みやすい本を作っている。

文章を読まず、PIC シンボルを見たり、表記された文字を読みあげる、絵や写真を見ながら内容を理解する、ふりがながあって読みやすいため、自信を持って声を出して読む、などの反応がある。

(3) DAISY

パソコン上の画面を見ながら、音声で読んでくれる。読んでいる場所がハイライトされるので、ついていきやすい。

ハイライト表示されている部分のテキストを自分から読もうとしていたり、文字が読めなくても生活年齢に応じた内容であれば楽しめることがわかった。



3. 著作権法改正

2006 年の改正で録音図書の自動公衆送信（インターネット配信）が可能になり、2009 年の改正で、障害者の範囲が拡大され、また障害者用に本の作成ができる図書館も拡大した。

4. 知的障害者の読書ニーズの調査

(1) 20 歳女性・ダウン症

ひらがな、漢字（小学校卒業程度）は読めるので、難しい漢字にはルビを振ってもらい、工夫して読んでいた。文字を書くこともできる。集中力が持続しない、文字から内容を想像するのが難しく理解できないことから、読書は好まない。しかし、読み聞かせでは、掛け声を出したり、とび跳ねたりして雰囲気を楽しんでいた。普段はテレビや DVD を見たり、CD を聞いて過ごしており、歌詞カードを読みながら歌を口ずさんでいた。図書館の静かな雰囲気が苦手で、迷惑がられるのではないかと思い、行きにくい。

(2) 15 歳女性・発達遅滞

文字から内容を理解するのが苦手で読書はあまりしないが、絵の表現が主な絵本程度なら内容理解ができるので、ときどき読んでいる。絵本では、生活年齢と発達年齢がことなってしまう、「つまらない」と言っており、最近はやめていない。「文字が読めない」ことを友人にからかわれてから、人前で読書することに抵抗があるが、図書館で行われる読み聞かせが好きで、よく図書館に通っている。

(3) 保護者の問題点

「自分の子どもは読書ができない」と考えていること、「読書すること」と「知的障害者」が結びついていない、知的障害者向けの障害者サービスを知らないなどの問題がある。

5. 考察

知的障害者本人やその周りの人の多くが「知的障害者は読書をしない、できない、好まない」と思い込んでいる。これを解決するには、

- (1) LL ブックのような、知的障害者に読みやすい本の作成
- (2) 知的障害者が図書館にいけるような環境と支援が必要である。